

日本語の所有格についての 韓国人学習者の文法性判断能力

金玄珠*

目次

1. はじめに
 2. 文法性判断テストに関わる先行研究
 3. 文法性判断テストのデザインと研究課題
 4. 調査の概要
 5. 結果と考察
 - 5.1 所有格の各意味・用法における文法性判断能力
 - 5.2 判断の不確定性
 6. まとめ
 7. 日本語教育への示唆と今後の課題
-

1. はじめに

本稿では「 N_1 の N_2 」を名詞型連體修飾と稱し、この中で前後の體言を結び付ける「の」を便宜的に所有格（屬格）と呼ぶことにする。Taylor (1996) は、所有構造について世界のあらゆる言語に見られる特徴としてそれぞれの言語のシンタックスによってその構造が異なっており、所有格の使用には何らかの制限が存在することを指摘している。これは第二言語学習者にとって所有格の習得が困難なことを示唆するものであり、日本語学習者に所有格の誤用が多いことは事実である（詳細は、金2001を参照）。しかし、所有格「の」については誤用分析や文法研究などで言及されるものの、格助詞との結合により複合的に使用されるもの「への での からの との」を含め、これらすべての意味用法に

* 東京學藝大學 大学院 日本語教育

おける文法性判断能力や中間言語の不確定性について論じた研究は管見の限り、見當たらない。

2. 文法性判断テストに関わる先行研究

文法性判断テスト (grammaticality judgment test) の信頼性や妥当性については未だに研究者の間で大きな論議を醸している (詳細は、坂本・小山 1997を参照)。Sharwood-Smith (1986) やGass (1983) は、文法性判断データと産出データが調べているものはそれぞれ異なるものとしているが、これに對してEllis (1991) や坂本・小山 (1997) は文法性判断データは学習者の総合的な運用能力を反映するデータの一種であるといっている。特に、坂本・小山は文法性判断能力は第二言語習得と密接な関係があるとし、学習者の文法能力を測るためのテストとして有効であるかどうかの問題は、調査者による Test-performing、つまりテストのデザインに左右される部分が大きいと述べている。文法性判断テストが第二言語としての日本語の習得状況を調べるために用いられた例はいくつかあり、黒野 (1995) 坂本 (1996) 坂本・小山 (1997) 小柳 (1998) 花城 (2001) 奥野 (2003) はその代表的なものである。黒野 (1995) は、初級学習者にとって「-テイル」の2つの用法である〈動作の繼續〉と〈結果の状態〉のどちらが習得困難であるかを論じた研究に文法性判断テストを用い、坂本 (1996) は助詞「は」と「が」の習得研究に、小柳 (1998) と花城 (2001) は条件文の習得研究に、また、奥野 (2003) は「の」の過剰使用における言語轉移の可能性を追求した研究にそれぞれ文法性判断テストを使用している。そして、坂本・小山 (1997) は文法性判断テストにより学習者の文法修正能力について調べ、日本語学習が進むにつれて文法性判断能力が向上していくことや日本語学習者の文法性判断能力は日本語母語話者と異なり、均一性が低いことを報告している。そこで、本研究では先行研究の成果を踏まえ、韓国語を母語とする中・上級学習者にとって所有格「の」及び「への での からの との」のうちどの項目が習得困難であり、中間言語の不確定性はどのように現れるかを文法性判断テストにより追求する。

3. 文法性判断テストのデザインと研究課題

文法性判断テストの補足的な方法としては、think-aloud taskや文法性判断テストを同じ

被験者に2回行うこと、メタ言語コメントスコア (metalingual comments score)、確信度スケール (confidence scale) などが出されている (Ellis1991; Han& Ellis1998; 坪根997)。また、文法性判断テストのデザインについては、非明示的知識 (詳細は、長友1996参照) の使用にテストのペース (pace)、つまり時間が影響していることがBialystok (1979) やHan & Ellis (1998) Han (2000) に指摘されている。特に、Han (2000) はテストのペース調整がされていない文法性判断テストは、学習者の非明示的知識を正確に調べるための手段にはならないと述べている。しかし、文法性判断テストを使用した研究の殆んどが時間のペース調整を行っていないのが現状である。また、ペース調整を主張するHan (2000) できえすべてのテスト文に同一の時間間隔を設定している。テスト文の長さのばらつきを考慮に入れてペース調整を行うことは非常に難しいことであるが、先行研究の問題点を踏まえ、テストの方法を改善していくことは必要であろう。本研究ではよりよいテストを目指し、坂本・小山 (1997) やHan (2000) での分類に基づいて文法性判断テストを次のようにデザイン・作成した (表1参照)。

表1. 本稿で使用した文法性判断テストの内訳

	タスク	リサーチ 課題
時間制限のある文法性判断テスト	正文か非文かの判定 (discrimination)	文法性判断能力 (言語的直感・非明示的知識)
時間制限のない文法性判断テスト	正文か非文かの判定 (discrimination)	文法性判断の不確定性

テストについては、Ellis (1991) に基づいて同じ被験者に文法性判断テストを2度行い、2つのテストの結果を比較することにより、判断の不確定性を調べることにした。ただし、2つのテストで使用したテスト文は同一であるが、時間のペース調整がされているかどうかにより2つに分けた。本稿ではテープによるペース調整が行われている文法性判断テストのことをGJT(grammaticality judgment test) I とし、時間制限のない文法性判断テストのことをGJT IIと呼ぶことにする。GJT I における時間の制限については、テスト文の長さのばらつきを考えた上で各々のテスト文においてテープの音声が終わった時点から3秒ずつ与えることによりテストのペース調整を試みた。研究課題は、①所有格の各意味・用法における韓国人学習者の文法性判断能力を調べる。②文法性判断における不確定性について考察する。の2つである。

4. 調査の概要

被験者は、韓国の大学で日本語を学ぶ中・上級の韓国人学習者21名（上級12名、中級9名）である。ベースラインデータの収集には横浜国立大学に所属する8名の日本語母語話者に協力してもらった。被験者の日本滞在歴については、1年間の滞在歴を持つ上級5名を除けば4ヶ月未満で非常に短かった。調査ではまず、被験者にダミー22問を含む32問の中に所有格の各意味・用法につき1問ずつを入れたテスト問題を提示し、非文か正文かを○×で判定してもらい、どちらか分からない場合は△を記入するように指示をした。この際、調査は数名のグループで行った。分析にあたっては、△は数があまりなかったため、正しく判断できたもの、つまり正判断にあたるもの以外はすべて誤判断と処理した。また、文法性判断の不確定性に関しては、同じ被験者による同一のテスト文に対する文法性判断が一致しない場合のみならず、2回とも誤判断が現れた場合も不確定性の分析対象にした。これには例えば、「人間と動物と違いはたくさんある」という非文に対して、GJT Iでは×の判定を、GJT IIでは○の判定をそれぞれ下しているものあるいは逆にGJT Iでは○の判定を、GJT IIでは×の判定をそれぞれ下しており、判断が一致しないものやGJT I、GJT II共に○の判定を下しているものが含まれる。同じ被験者に、GJT IとGJT IIにより同一のテスト文に対する文法性判断を2回りさせたのは、判断の不確定性がどのように現れるのかを調べるためである。所有格の分類にあたっては、鈴木（1972）を参考に「の への での からの との」をその意味・用法によって次のように分類した。

〈所有格の分類〉

- の 1)人間関係の指定―「田中さんはわたしの友達です」
2)人間関係以外の物事の指定―「日本語の発音はとても難しいです」
- への 3)ゆくさき―「遠いところへの引越しはお金がたくさんかかります」
4)相手・態度の対象―「母への感謝の気持ちでいっぱいです」
- での 5)手段・道具―「現金での購入もできます」
6)動き・状態のなりたつ場所―「日本での就職を考えている外国人は多いです」
- からの 7)時間・空間における起點―「車の窓からのなげすてはやめましょう」
8)送りぬし―「読者からのお便りを紹介します」
- との 9)状態が現れるために必要な対象―「人間と動物との違いはたくさんあります」
10)相互的な動作の相手―「先生との話し合いは午後からです」

1) 2つのテストは、データ回収をスムーズに行うためにGJT Iが終わった後すぐにGJT IIを行った。

被験者の学習レベルの査定は、調査者による ACTFL OPI (Oral Proficiency Interview) や筑波大学開発の SPOT (Simple Performance Oriented Test) Ver.A を用いた。ACTFL OPI のレーティングは、テストの資格を持っている調査者ともう一人の日本人テストの 2 人 (レーティングの一致率: 95.2%) で行った。ACTFL OPI の結果と SPOT Ver.A の点数は スピアマン順位相関計数 0.72, $p < 0.01$ で強い相関があった。

5. 結果と考察

5.1 所有格の各意味・用法における文法性判断能力

まず、各被験者が所有格のどの項目で正しく文法性判断ができ、どの項目で失敗したのかを見るために便宜的に、正判断を行ったものを数詞1で、誤判断を行ったものを数詞0でそれぞれ表し、正解には1点を、不正解や無答には0点を与えた (表2、表3参照)。その結果、GJT I では、上級は平均5.8 (正判断率: 58%) を、中級は平均4.3 (正判断率: 43%) を示し、それほど大きな相違は見られなかったが、GJT II では、上級は平均7.3 (正判断率: 73%)、中級は平均4.4 (正判断率: 44%) で、中級レベルと上級レベルの間に顕著な差が表われた。日本語母語話者については、GJT I では平均9.6 (正判断率: 96%) GJT II では平均9.8 (正判断率: 98%) を示した。

表2. GJT I の結果

(1:正判断 0:誤判断)

被験者 分類	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	中	中	中	中	中	中	中	中	正判断者数の 合計 21/
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	1	1	1	1	1	2	3	4	5	6	7	8	
の1)	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	21
での5)	1	1	0	1	1	1	1	0	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	0	1	17
からの8)	0	1	1	1	1	0	1	0	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	0	0	0	14
の2)	1	0	1	1	1	1	1	1	0	0	0	1	1	1	0	0	0	1	1	1	0	13
への4)	1	1	1	1	1	1	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	1	1	0	12
への3)	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	11
との9)	1	1	1	1	1	0	0	1	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	9
での6)	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	4
からの7)	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	5
との10)	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
得点 10/	9	8	7	7	7	6	5	5	5	4	3	3	6	6	5	5	4	4	4	3	2	

表3. GJT IIの結果

(1:正判断 0:誤判断)

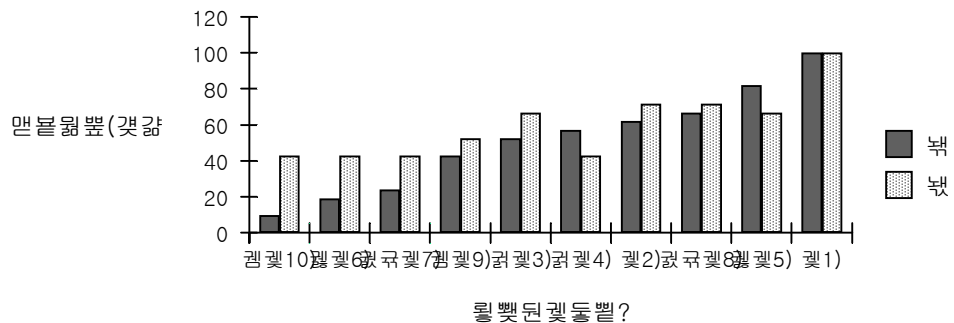
被験者 分類	上 5	上 3	上 1	上 2	上 4	上 6	上 8	上 9	上 11	上 12	上 7	上 10	中 8	中 6	中 2	中 1	中 4	中 7	中 5	中 3	中 9	正判断者数の 合計 21/
の1)	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	21
での5)	1	0	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	0	1	1	0	1	1	0	1	1	16
からの8)	1	1	0	1	1	1	1	1	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	15
の2)	1	1	1	0	1	1	1	0	1	1	1	0	1	1	1	1	0	1	0	0	1	15
への3)	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	0	1	1	0	1	1	0	0	0	0	14
との9)	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	11
への4)	1	1	0	1	1	0	1	0	0	0	1	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	9
での6)	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
からの7)	1	0	1	0	0	1	0	0	1	1	0	0	1	0	1	0	0	1	0	1	0	9
との10)	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
得点 10/	10	8	8	8	8	8	8	7	7	7	6	3	6	6	6	5	5	5	5	1	3	3

次に、所有格の各意味・用法における正判断率を算出してから GJT I の結果を基準に正判断率の低い順に並び、GJT I と GJT II の結果を比較した（表4・図1参照）。

表4. 所有格の各意味・用法別のテスト問題や正判断者数及び正判断率

所有格	テスト問題	文法性	正判断者数(正判断率)			
			韓国人学習者		母語話者	
			GJT I	GJT II	GJT I	GJT II
との10)	先生と話し合いは午後だからまだ時間がある。	×	2(9.5%)	9(42.9%)	7(87.5%)	8(100%)
での6)	日本での就職を考えている留學生は多い。	○	4(19.0%)	9(42.9%)	8(100%)	8(100%)
か	正判断率(%)					
との9)	人間と動物と違いはたくさんあります。	×	9(42.9%)	11(52.4%)	8(100%)	8(100%)
への3)	遠いところへ引越しはお金がたくさんかかります。	×	11(52.4%)	14(66.7%)	8(100%)	8(100%)
への4)	母への感謝の気持ちでいっぱいです。	○	9(42.9%)	9(42.9%)	8(100%)	8(100%)
の2)	日本語発音はとても難しい。	×	13(61.9%)	15(71.4%)	8(100%)	7(87.5%)
からの8)	読者からの便りを紹介します。	○	14(66.7%)	15(71.4%)	8(100%)	8(100%)
での5)	現金だけでなくクレジットカードの購入も可能です。	×	17(81.9%)	16(66.7%)	7(87.5%)	7(87.5%)
の1)	田中さんはわたしの友達です。	○	21(100%)	21(100%)	8(100%)	8(100%)

圖1. GJT I と GJT II における韓国人学習者の正判断率の比較



その結果、10項目のうち最も正判断率が低く、文法性判断が難しかった項目は、との10)(I:9.5% II:42.9%) での6) (I:19.0% II:42.9%) からの7) (I:23.8% II:42.9%) で

あることが分かった。この3つを除くと、との9) (I:42.9% II:52.4%) への3) (I:52.9% II:66.7%) への4) (I:57.1% II:42.9%) の2) (I:61.9% II:71.4%) からの8) (I:66.7% II:71.4%) での5) (I:81.9% II:66.7%) の順に正判断率が低かったが、これら6つの項目は、の1) (I:100% II:100) に比べると文法性判断が容易ではなかったことが判明した。正判断率の変化については、日本語母語話者や韓国人学習者者共にGJT IよりGJT IIの方で上昇する傾向が見られたが、への4)とでの5)に限っては他の項目と異なり、GJT IIの方で正判断率が若干低くなる傾向が観察された。への4)に關していうと、GJT I で半数以上の被験者が正しく判断できたもののGJT IIでは誤判断を下した例が多く (表5・圖2参照)、判断の不確定性が非常に多く見られたので、との10) での6) からの7)と共に習得が困難な項目であることが推察される。また、での5)については日本語母語話者に對する調査の結果、87.5%の人が×と判断を下したが、判断にヘジテーションが全く見られなかったとは言えず、学習者の正判断率がGJT II で下ってきたのは恐らくテスト問題の難易度の差に起因すると考えられる。この2つのテストの間に相関があるかどうかを5%の有意水準で両側検定を行ったところ、ピアソン相関計數 $r=0.89$ ($df=8$) で、強い相関があることが分かった。これは、時間制限のある文法性判断テストで正しく判断が下せた学習者ほど、時間制限のない文法性判断テストでも正判断に至りやすいということを示している。

5. 2 判断の不確定性

2つのテストの結果を比べることにより、所有格の各意味・用法における文法性判断の不確定性を分析した (表5・圖2参照)。

表5. 文法性判断テストI とII における判断の不確定性に該當する被験者數

(上級：中級)

所有格	文法性判断 テスト I→II		
	0→0	0→1	1→0
との10)	12 (3:9)	7 (7:0)	0
からの7)	12 (7:5)	4 (2:2)	0
での6)	11 (3:8)	6 (6:0)	1 (0:1)
との9)	10 (3:7)	2 (2:0)	0
への3)	7 (2:5)	3 (1:2)	0
への4)	7 (4:3)	3 (1:2)	5 (2:3)
の2)	6 (3:3)	2 (1:1)	0
からの8)	3 (2:1)	4 (2:2)	3 (1:2)
での5)	3 (2:1)	3 (1:2)	1 (0:1)
の1)	0	0	0

圖2. 文法性判断の不確定性



不確定性のパターンには、GJT I、GJT II 共に正しい判断が下せなかったもの（以下0→0）、GJT I では正しく判断できなかったが、GJT II では正しく判断できたもの（以下0→1）、GJT I では正しい判断が下せたが、GJT II では正しい判断が下せなかったもの（以下、1→0）、の3つが含まれる。0→0のパターンが最も多く現れたのは、との10)（上級3名:中級9名）、からの7)（上級7名:中級5名）、での6)（上級3名:中級8名）の3つである。このうち、との10)やでの6)に関しては、0→0のパターンのみならず0→1のパターンも10項目のうち最も多かったが、誤判断から正判断へと進むことができたのは全員上級学習者であり、中級学習者はこの中には全く含まれなかった。この2つの項目は、中級学習者にとって文法性判断が非常に難しかった項目である。からの7)もやはり0→0のパターンが非常

に多かったが、との10)やからの7)に比べれば、0→1のパターンが少ない方であった。これは、中間言語の直感による即時的な判断のみならず、時間を掛けた判断も困難であり、時間を掛けても正判断に至ることの難しかった項目である。しかしの1)は、判断の不確定性のような現象は全く見られず、文法性判断が容易だった項目である。

次に、0→0のパターンの出現が多かったものから並べると、との9) (上級3名 中級名)、への3) (上級2:中級5) への4) (上級4:中級3) の2) (上級3:中級3) からの8) (上級2:中級1) での5) (上級2:中級1) の順になる。また、0→1のパターンは被験者の全員が正判断を下せた、の1)を除く9つの項目に現れ、1→0のパターンは、での6) (上級0:中級1) への4) (上級2:中級3) からの8) (上級1:中級2) での5) (上級0:中級1) の4つの項目に見られた。こういったことから学習者の文法性判断は日本語母語話者と異なって不確定性が高いことが明らかになり、坂本・小山(1997)の研究成果を支持する結果となった。さらに、GJT II で非明示的知識と共に明示的知識が使用されたという假定で結果を考察すると、文法性判断を行う際、非明示的知識により即時に文の全体像が掴めない学習者は、分析のできる時間が与えられ明示的知識が使えるようになっても容易に正判断に至れないということも考えられる。

6. まとめ

以上のことをまとめると次のようになる。

- 1) 所有格の各用法における学習者の文法性判断は均一ではなく、文法性判断が非常に難しいものと容易なものがあることが分かった。
- 2) 時間制限のある文法性判断テストで正しい判断が下せない学習者ほど、時間制限のない文法性判断テストでも同じエラーを産出しやすい。
- 3) 学習者の文法性判断能力は日本語母語話者と違い、不確定性が高く、中間言語の直感により正しく判断できたとしても同じ文がもう一度提示された場合に判断に迷うことが多い。

7. 日本語教育への示唆と今後の課題

坂本・小山(1997)は、インタビューや自然発話などではなかなか出てこないデータが調

べられるとされているが、「への での からの との」といったものは今回採集したOPIデータやKYコーパス²⁾にもそれほど現れず、こういった会話によるデータ収集の困難な文法項目の習得研究に関しては、文法性判断テストは大いに活用できると言える。文法性判断テストは短時間で大人数に対する一斉テスト形式で行うことが可能であり、教師が学習者のメタ言語意識を調べたり、どのような文法形式において習得困難が生じるかを予測したりする目的で使用することは十分考えられる。また、言語学習の目標が投射的規則の育成である（詳細は、山岡1997を参照）ことを考えれば、学習者が時間を掛けても習得に至ることの難しい言語形式についてはその原因を調べ、言語表現の意識的な焦点化により、学習者に意味と形式の連合に気付かせることは必要であろう。今回の調査結果を踏まえた上で文法性判断テストの見直しをし、所有格の難易度階層モデルを考案することや習得における言語轉移の可能性を調べるのが今後の課題である。



【参考文献】

- ・奥野由紀子(2003) [上級日本語学習者における言語轉移の可能性—「の」の過剰使用に関する文法性判断テストに基づいて—] {日本語教育} 116, 日本語教育學會, 79-88頁
- ・金玄珠(2001) [初・中級の韓国人学習者に見られる「ノ」の脱落について] {日本學報} 50, 韓

2) 英語・中國語・韓國語を母語とする日本語学習者それぞれ30名ずつ（初級5、中級10、上級10、超級5）を対象にOPI（Oral Proficiency Interview）を実施し、そのデータをすべて文字化したデータベースのこと。

国日本學會. 13頁

- ・黒野敦子(1995) [初級学習者における「-テイル」の習得] {日本語教育 87, 日本語教育學會 153-163頁}
- ・小柳かおる(1998) [条件文習得におけるインストラクションの効果] {第二言語としての日本語の習得研究} 2, 第二言語習得研究會. 1-26頁
- ・坂本正(1996) [助詞「は」と「が」の習得について—文法性判断テストを通して] {平成8年度日本語教育學會秋季大會豫稿集} 日本語教育學會. 166-171頁
- ・坂本正・小山悟(1997) [日本語学習者の文法修正能力] {第二言語としての日本語の習得研究} 1, 第二言語習得研究會. 9-27頁
- ・鈴木重幸(1972) {日本語文法形態論} むぎ書房. 225-228頁
- ・坪根由香里(1997) [「ものだ」「ことだ」「のだ」の理解難易度調査] {第二言語としての日本語の習得研究} 1, 第二言語習得研究會. 137-156頁
- ・長友和彦(1996) [第二言語習得における顯在的知識(explicit knowledge)と隱在的知識(implicit knowledge)—インターフェイス・ポジションが構造シラバスに示唆するもの—] {日本語の教育と研究 細田和雅先生退官記念論文集} 溪水社.

180-200頁

- ・花城可武(2001) [文法性判断テストを使った条件文の習得状況—正解率と確信度スケールを用いて] {第12回第二言語習得研究會全國大會豫稿集} 第二言語習得研究會. 87-92頁
- ・山岡俊比古(1997) {第2言語習得研究} 桐原 ユニ. 298頁
- ・Bialystok,E.(1979) "Explicit and implicit judgements of L2 grammaticality" : *Language Learning*. 29, p.81-103
- ・Ellis,R.(1991) "Grammaticality judgements and second language acquisition" : *Stodie in Second Language Acquisition*. 13, p.161-186
- ・Gass,S.(1983) "The development of L2 intuitions" : *TESOL Quarterly*. 17, p.273-291
- ・Han,Y.(2000) "Grammaticality judgement tests :how reliable and valid are they?" : *Applied Language Learning* . 11,1, p.195.
- ・Han,Y.&Ellis,R.(1998) "Implicit knowledge, explicit knowledge and general language proficiency" : *Language Teaching Research*. 2,1, p.1-23.
- ・Sharwood-smith(1986) "Comprehension versus acquisition:Two ways of processing input" : *Applied linguistics* . 7, p.239-256
- ・Taylor,J.R.(1996) "Possessives in English : An Exploration in Cognitive Grammar" Oxford University Press. p.11

■ 謝 辭 ■

本稿は韓国日本文化學會2002年度秋季國際學術大會における研究発表に加筆し、修正したものです。會場で貴重なアドバイスをいただきました坂本正先生（南山大學）、本研究を進めるにあたって、御指導をいただきました金澤裕之先生（横浜國立大學）や林部英雄先生（横浜國立大學）、OPIのレイティングにご協力くださった田尻由實子さんに深く感謝申し上げます。調査にあたっては、慶北大學の吳鐘烈先生、慶北大學語學堂の日本語講座の講師、受講生の皆さんそして横浜國立大學の先生方や院生の皆さんにご協力賜りました。この場をお借りして心より感謝の意を表します。

要 旨

本研究では、韓국의大學で日本語を學ぶ中・上級レベルの韓国人學習者21名を對象に、所有格（屬各）「の」や格助詞と結合した形で複合的に使われるもの「への、での、からの、との」に焦點を當て、彼らの言語的直感や中間言語の不確定性（indeterminacy）を調べるために文法性判断テストを実施した。調査では、同じ被験者に同一の文法性判断テストを2度行うことにより、文法性判断における不確定性や不均一のパターンについて調べた。その結果、1) 所有格の各意味・用法における學習者の文法性判断能力は均一ではなく、文法性判断が非常に難しいものと容易なものがあることが判明した。2) 時間制限のある文法性判断テストで正しい判断が下せない學習者ほど、時間制限のない文法性判断テストでも同じエラーを産出しやすい。3) 學習者の文法性判断能力は日本語母語話者に比べ不確定性が高く、言語的直感により正しく判断できた學習者でも同じ文がもう一度提示された場合に判断に迷うことが多い。ということが明らかになった。

キーワード：所有格 文法性判断能力 不確定性 言語的直感 韓国人學習者
テストのペース調整

투 고 : 2003. 2. 24
2차 심사 : 2003. 3. 22
3차 심사 : 2003. 4. 12

住 所 : 日本國茨城縣水戸市吉澤町844 -2 -E306
電 話 : 029-247-2702
E-mail : kimrosa@livedoor.com